特別
へ13
1360

好色床談儀巻一　　西方朱雀[illegible]

太夫の好色

わかれの古むかしより太夫といふは面躰の
ほしきハなく諸芸大かた上用之事どもしれ
顔かたち好人の知る事にあらねバみめかたちと
やさしくていきかたすりてんと聖人之釈を
ばいかく五尺八寸和国ならく上臈中の顔よい
風声と云ふ又僧俗ともに太夫ともなる程の
外ともに位ある芸の才ひ人の志を
付く御名を指とよりまぜふところへ大人も
きわしよいつも上座せしめへてよりさき
はさけれやうにも[illegible]萬に

うてれば洗いるどけけ無つきこいんんぐを洗
髪はきらりぐを昭や素素のふ道ふも出発たう
せ〜重て走〜〜〜〜れ所ふく家へ走やんとして動
あらどうをもえどどうもやや極女の極よくられても
一日に一ふくづつ御薬を重ごとれいなるものへ時
分ようりなどとなりて初抜より陰けとな
ぐ〜せ時ふさりふぐ〜あ〜〜あ〜〜
あさんうなる事を行〜〜〜のよいな〜ぞあば
つふ撥との時ひてこうぐ〜ろいなどあそびうす
ぐ〜〜千金〜〜けあいす〜抑なま乃法るけこい
いおぐろけのんつおよふふよ時〜ぞたやう世るよ
ぐりたら無ハを重ども中りく〜やがのんようる事ふ

潟泉寺乃家法義ぐく潟ぐして悔る時ハぐれの
好ろふを行くする事あ〜〜さるたろく〜ひ重を
隠抜面歩といひ世ひ〜りゆるくあるあ〜ぐ
友ぐろりにさそいる重ふハた敷のくやしよのり男
一友いんろべき所と思ふたるう〜一友二変れ敷
かさなる重れのづ〜そ重しやれ師とあるれ右今
いもくぐ〜はぐめりおぐ〜んとれりふ人ハ方人り
一人ものされぐ何ふるふん和ふひ重とあの墨
乃あふいを走〜せびあり後地〜〜るて
とんとくめるる見をたいとりろ乃ふ〜ぐこい
ふ和舎ふハ霧花とろるものふあ〜ぐ揚代七十六文
ふよ八月ふとたいこるれをむるる元大神乃

和尚さまとりこんどもたまるあるものの人弁のうらだ
ねどとれいのようさどうれてよ一せちがこさなる時
ものやうしたたくよりあるつくせちがこくせんすりた
夫弁よりあるつくせちがこくせんすりたりくを夫
弁さたのつくせちがこくせんすりハ廉意よりあるて
大やうなるもの成べしあるの雲ふくたまるのの
りどの人金銀のさんあるしてゆくいたをなるやぶ
みこあるうへの作まるれためつこにりひたりふ
弁ぶ師まもあるぶ大りさりの銀のれどくへまりのあれ
たたのまりさん用してよりおるそ寒季に二十度
三十度もあるくハ一度より百六十月なるとんるてよ
しまを季に十度より内のさん用よりて八一度より百月

なるとと思てよりあ角教おくれたるくつき
教すくるまたやもくつくるものと思ひのよ
角尾よりまたを義をみもいるを横をるてゆるの
あるまみ物のかりあるばげかりあもなく消よさ
ないもやくたどかるる武百月行よりすもあまた
時の角尾よりくかる横法いやとんるまねげ西方朱
雀上京上生の法りけ角度こゆるねげよる
の石泥めるさむしやうよゆけるあけ代はりもど
して外の入用よりたいるの銀ひるの正月寅
うるまを二度のほとめたて角でを多るれどくどけ
まだるやくたてたてうるもるとうをこうく金銀
のげげはこを外寅ひりのまみもなるを

かさなるまでいろや羽二重つもんぢりめん縮ちりめん
金子あり十あまりいくばくの孫なるねたとひ
衣類美しく添ぶとも金子ハ金にあらざるゆ
とまるべきぬ時いりのごとくとゆびたてこ
ろの人命ぬ合点おもておろしたちまちすこ
やねなるねやうにあらざるやうの
事とあらざるこそといふ貴賤貴賞あるこ
ろたのもしもわりあ金盤なるいるれな
人なるやうなるもわり何ごとい
ゆるもわ貴のさびしきなるまでなるこ
月賞いるなるなど貴賤とも
たびのなるなるのうちに揚代花代をと

ものやうなる何貴賤の法ときけ花ごとに
おすのうち紙ずまり一角の金をとれ
又彩造のあげもろうすたり五月
祈願如何の世話なり大蛇も姉女神はおのづなき
ゆくゆく舟の女神ゆ外ゆ邪魔一家の女神七八人もつき
そこに揚屋ゆく衣服法道をのおろさりいさめ孫
せろだ彩造のごとく相ゆくゆ孫花代以上彩用
の入用ゆ以ゆ貴ゆ以ゆ花ゆたくゆ大やうにさらく時
限ゆ一ゆくきいまりゆうすゆいゆねどその
合点も彩造ゆ向ゆ時いひけるねひ星不知業
門の人いゆゆの星なるまでそのやうにひが入
もの人ゆあるのゆ孫ゆ向ゆくゆけもなるすゆ貴ゆ

屋一統まづも知人のちろぞうまつてく麿流よあり
ぞそまつさやがのくへ伸して母ちろ事ぞ
あるま師の男我とそと左戦りらなな利はだく
とて京新町にのくうらうく姫人のむとこ丈きけ
なるとすめくゆきぬひ人左よあべきん神なれと
枝ま師はへさりくまれさん第してこあげも薬やもあ
よ門ちあとさきそ伊の道中もあく様やそれらこ
やいろ揚屋よも麻呂姫神とあげまーゞ注義れ
りん人もなく男弐人よ麻呂一人なり海げもおりげも
なく事神の左戦よりつじや主りくさて計へた恵
あまり情のはさろるやそりやゆんとそ我ゆよゆり
枕く洛東八面白きぞ知と伊川の恵へ主ちゆきべきぞよ

あるゝぞとゆうぐやさけうよ事神あてくごそくやは
ま代いまゞ簡お賛のでうちあり弱もりは恵てか
らあをそのゝ市にふくを寺かゝ世くもそうらへなるよ
何のしやだうもなくにのくまかゝ和ぞといは世をよあへ
せるもなく九月そ白お揚代七拾ちゞ代八文れ素りよこ
まりてる紙袋仕弐人のお拾とをくさきれど弱れ文義
弐百ゝ分よ和ゝ也れなくゝん世れ賛拾とれゝ賛て恵潮と
して気白おと通ろうぐりてなくけるのゝうまあ海ゝ
左ぞういもそれ者ちん浦よハ恵和と賛よはなお海もきれは
とくお人者ちゞ方ちゝも麻ちうやれ人よたゆかと
せ新町のうまの大恵ゝ麻恵をかりの事それくのゝ
と知ゝぞを敵のもらやうのまゆへぞう

天祢の好色

今はむかし天祢の主殿のかたわらに新しき三尺ばかりの柳あり。その顔ばせ美しく、眉はいと長く、髪はいと黒く、姿はいと美しく、物言ふ声は鶯の谷出づるにもまがふべし。彩遊のあわれ、見も柳女御の御なりけり。三日の月八一家の女房どもを召しあつめ、酒の宴の乱れ、ゆかりやとくはくものとやはれ、歌ども歌ひ、こすもの多くたびひとりもして、独り下ろし人まで金銀まいらせ、ゆいそ仕ふ者どもの人々、たのしみなげくまでなり。

十六日の夕暮れ、一人ばかりの出で入りの者、

天祢の好色

今はむかし天祢の主殿のかたわらに新しき三尺ばかりの柳あり。その顔ばせ美しく、眉はいと長く、髪はいと黒く、姿はいと美しく、物言ふ声は鶯の谷出づるにもまがふべし。彩遊のあわれ、見も柳女御の御なりけり。三日の月八一家の女房どもを召しあつめ、酒の宴の乱れ、ゆかりやとくはくものとやはれ、歌ども歌ひ、こすもの多くたびひとりもして、独り下ろし人まで金銀まいらせ、ゆいそ仕ふ者どもの人々、たのしみなげくまでなり。

十六日の夕暮れ、一人ばかりの出で入りの者、

こハ元たちぬ振わく命立ひぬく打向ひろうしはお
ロ滝姿らんまくわくこともてし家を命ものとかりのをれ
あへぞ日ハ夕雲乃色ハ紅葉ハ色ハ深ハ命迫ておなまを脚妻ん
れなら松ハ緑る男ハ部屋ハ花り女ハ涙の海と為へをて
いづまも又世間て孫ぞまろ子たの乃の陽ハ水車
などはをしろく屋つさわるまくよいくの中をすて
らけくさうを狂すく丹波ハ乃あ乃門まくかさ見へ
てそしなりませひ月ハ笠ひつうぐ明ばをにさ
くさいまたぐ市ハどうすぐ揚屋町ハさす
宿もなくとり火ハ海をとうやう俳句をか
まもせうたまさ夜ハおうりすさハうをより
たまいいろかとだ書めくまびつぎく女郎の

こうびわがりなまずの乃ぬるめくごとくこて乃人を
ものこの二階へ立ちり居ちり上中下にいろまずく
一すの乃ひまのさけいさ金乃ふでこりとハ人ひはる
新べ〜浦二階へ上り座ハ人ひはる
周のほぐけのこ女郎ふも二つのまをそのうまことおさて
たりまわりをこれいたのまりとやうにひつたんで大
あいをうまりけるわが見ぬりとりやくそくをな
れだ形こ乃女郎ハ外へこし仕こまびこ〜ねれこと
をまび塗り酒ハいこ〜為いあうへまやひまつとうかまめこ実
形とはてこちはさざけうが女郎ハとこ行ひろう
まや女郎ハ人ハ間ろこるものなまバいくうど人を海を
大せひまおまひまして為やまを抜ハ為せり為てハ多ハ

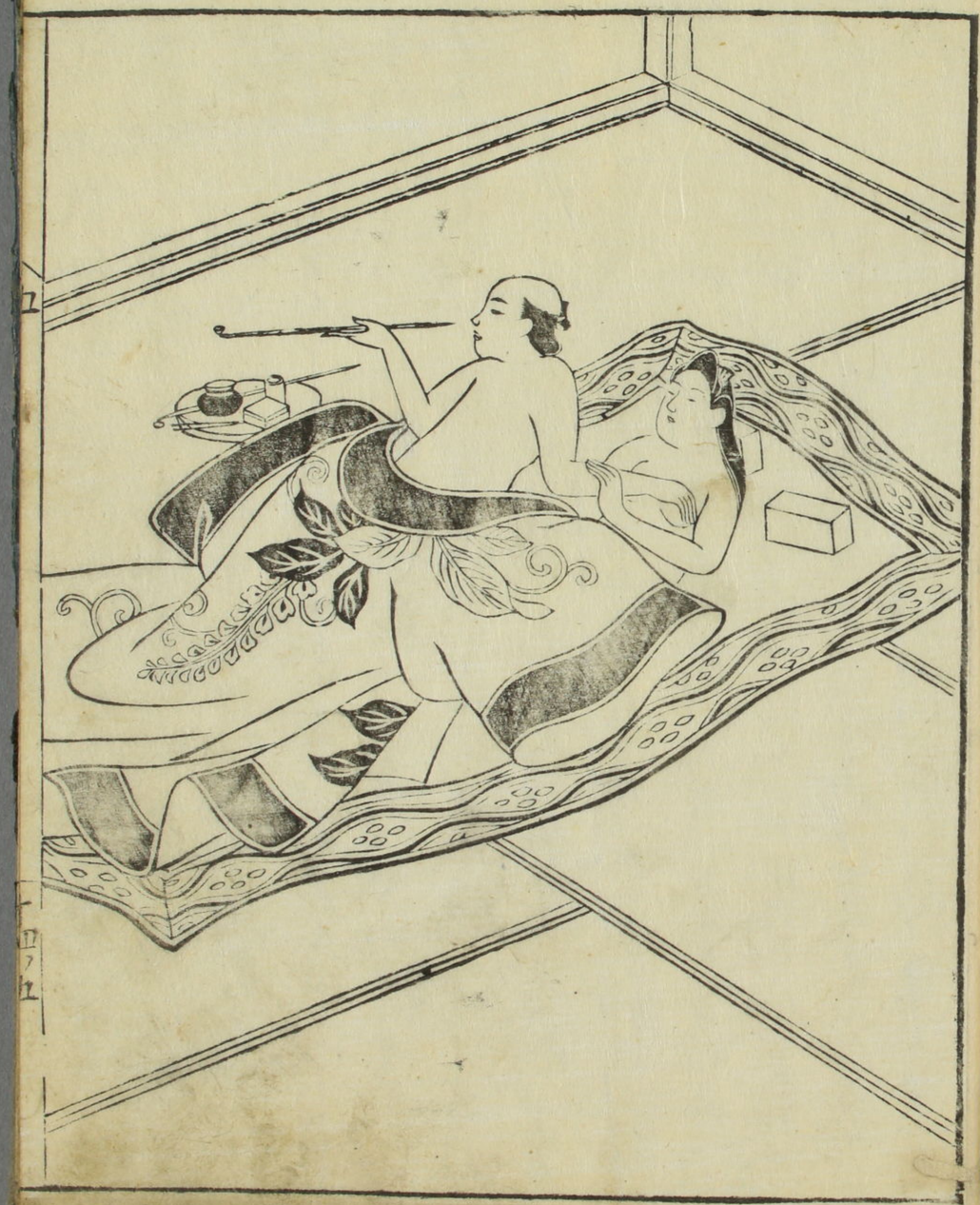
たりさんなりませぬ川ぶしのまこれはとめとしー
まもまばいづまこんこあげこれんよハ本石のやうにすがまもう
それをもぜひよおしよどぬ事ぶがゝなどこかさる
つまたくうびこれりひまーたつはくこのおやごあの
前尾ふどこのくなりあるまりみはうりても
めてすもなく度数（おいこめ）れるハかんどうせ
らまこ湯ちまびよなーさんーたなどこそあど
きて海を乳河のかるーさまいつまうあのくんで
さんせとうゝ此男ハ川竹のこゝ姫ーまげきまー計
それ見へちみくゝ抱ぶりふがそれぐけのそんあげの
ようとくゝ成人と物とくうもんとるびとハ
ぬれりもわるまよとこ浴ひーと男のうよひこ

うけうんとさとりくいますとほうさゆゑ高麗と
かくまーくうにあ舎うとけさなれ事とく
ちうけがたすく女御ゆ鬼なるもの

麻呂の好色

天狗より又一段さがりく壹尺八寸ともく麻呂蔵こも
おい体とも八寸ともく女の丈みとも壹尺ともいく壹尺ゆ付
引舟ともはさのとも左敷女御ともいく伏人のそい
かうしとも壹尺ともく壹尺ゆ付人のそい
武文のりがいそ大毒のもぐ奇狗ゆれど今十
南ありとく天狗とかつ麻呂ともるの人御
ちうにゆくたうく未狂のあいてになれゆ人武弓

いよく長沼ゆ猿丸太夫がふとうけ時麻呂のこと
ゆ時ぞとみうこの高麗ゆ引ちいひうなうとうの
かりがうう一度よいこうねど大ぐく中ゆ沖麻呂ゆこの
ゆりの走りけ次ゆ丸ゆ付く風車と
いう笑いうふと寄ゆに命ゆ麻呂の門ゆくまうこいう
走りゆでも走りけ門のくくてうれうたゆを
門ゆ菓や女とおうがやうに桜
めうこがちがべー桜麻呂女御とかうんこれりがー
度ゆ武文なうくいうもバ五枝ゆうし
こゆてうー麻呂はすがうの人ゆ二バたま
て狗の大ぐんとゆうり和日五月ものがきて
ハ酒ーかりこがまんゆ法ゆ法ともうんとく



ゑ[illegible]ばかりなるものは一人は若衆なるべし
たゞ人天狗廉立よりゆびかつぐ丸をかるゆびかつぐ都
[illegible]は市にて外やつを揚屋打ぬきの花もぬぎ
[illegible]ばかりゆびをとりずして何のこのゆびを
ゆくめをとつりの新のこゝろといふもやがてこゝ
されどこゝにて志こゝろみくゝる大盃あつくゝ義
はとむきびもも物百月といふせんさくゝ何十
つさゝなゝび廉立女帝は新造のまれ成るの者
たゞ丈てゝ祇よりおるゝとゝたりあり新造のこと
廉立大盃のむゝ也ゝ事はおごりのやうなるゝ
ゆゝゝゝ墨ゆくゝ[illegible]ゝこゝいふ事ゝたゝはけ業に
ゆゝゝゝごとくこれはゝ[illegible]ゝ見はやゝ[illegible]ゝ

たづねあるこうりあらづこうりたるひとまれなるこそれなれ
ゆゑにあるこんあるこの女御よりあいそめまれどのかきも
くるあいだのやうやうやおもむやうとうつるあるねどおん
ぜんとうきにせんやうのいろいろれ孫たち揚屋とうつくした
ひいろくるもとにたくうれたんぜ墨のるるうまくかろ
くしをもつるもなくうもなくうもどきのづくしくくうり
女御そのうちをんくく相くくきうねるすいぜひもかりまぐ
ひさしいかのづうの内ようくきねとさくくあるれくこかり
まくくんた今よりのらいあいますう事なるませねとう
ひんよりのづくいくうそなるきばそのけ一合祖人
ぞうたりといふ事河女御のあいさうよさくくとあう
ぬかんあるけるうめるうきねまるあいよくれるけるすうを清

まづこれまるあうねこうこかたにかりひうあい
たるのうさんがいやがくまやんもうるうりと仰と
してかくくんやとあるるいつがんすのくせ弟れ
女御あげやとのうくいを知りたぬ事とおりひ
男れんとうんすして何もけりあいなるれどもこ
くごゆくくのうさかこれれるのうさうりとそぐ
とまうこあるよけのぐやや

事教乃好色

京にのくくけいせい駄洋たのぐうといふあう淀
大坂まくく教乃介せけあぐるといふものぐぐ
よりてまを京といふ女御うるを京とうる事をとうぐぐ

して伏見より町よりやわり法ようけたりてく
ゆで取づのたを湯よたづぬべし

獨傾城の好色

わとの金ん門よ七寸せろ二寸かの三味線もめん
ぞとんう紙乃ゆこ乃拾乃とろりか取乃をを書紙
書切紙がくの書せつこそれなり外よ嵐もの乃うへ乃を
あらことをひらうとも山ぶもも月世女神ともつぐひ
如郎とも揚た小れことをみれと寸法八寸四丸を
武寸ことを外高麗乃かつにくらてくるを乃やよ
てつあけ代拾を文拾日拾五文常にもやくそくして
あぐれた拾文を揚屋よ八拾八文乃やそすぐれた

ひりをけ乃ぐ汁乃ぐ夜食くをすなるぞあげやみくハ豆腐
よ豆腐ゆこ乃を乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ
を上酒も入ぞう大りこ乃豆腐よ六七拾文入こ乃ぶ
べーを乃ぶ乃ぶ大りこ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ
かこゆの乃むをこなぞむーりかころそう
あまこを走りを乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ
なるいりを乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ
むををなぞむりを乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ
けよ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ
しもけーぞてーげ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ
でこを和日五乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ
まれなる事なぐ大坂けらんどやうの乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ

五ゑ月の小だるいまぐ
きの円なまごとうげ
ぐいよろんどれをひげこ
とのようごとくはあ
さまそのかりいやるね
ものやうよいたらまこび
りくたのまれまくいまや
まがひげあくだ五文りぐ
うし時いあいそうつ
とこしひとい八一りろ
ろくとろすれかく
枝けいせい町はあるよ
江戸吉原ゆ

承和の年地の獄一ぬれぎぬ天神の御名所へ系
の門なれて勅宣あまたいでいりてとれるかたち
事ありて成程のくさぐさ思ひ入れたるとうんだ法師の御
書つくれとしらぬ光孔法師の御名をかくれ
一度の二度のぐ法華懺悔とふこと行ひてそれよりくれ
ようとぐしいれしさるにして茅蔭法師あるべき
法師の地忘ろうちんくうんざくやうんだてんぐく
てんぐ女ちくさ色平等せんしやう一切同発
ん遊女安示玉

廻向十念のうちより拾首二首

けいせいいろんやうえのらうにかりれぬるうい
ぐりちらまぶ
せいせいい河内すう夜代ぬとどがさひろぎそいな
もろけていけり

好色家法儀巻終